



自分より上手い選手でも 気持ちでは負けたくない

写真：ベースボール・マガジン社

ソフトテニスの大会では、国内最高峰と言われている天皇賜杯・皇后賜杯全日本選手権で昨年3位という素晴らしい成績を収め、多古町が大好きで自分の原点だと話す木川さん。今までを振り返ってテニスを始めたきっかけや、心がけてきたことなどをうかがいました。

嬉しさと悔しさを

やっぱり優勝したかったですね。3位という成績は悔しかったです、それよりも嬉しい思いの方が大きかったかな。この大会は、日本最高峰と言われていて、中学生の時には天皇杯で活躍している選手のフォームをみて学びました。だから、僕なんか3位になっちゃっていいのかなっていう気持ちもあって、驚きと嬉しさが混ざった感じなんです。今、中央大学の4年生ですが、今まで結構苦労してきた面もありましたし、学生の大会では悔しい思いもしてきました。それなりに頑張ってきたつもりでもいまずので、テニスを始めてから10年余、集大成なのかもしれませぬ。

きっかけは父親が硬式テニスをやっていたこと

父に勧められて小学生のとき学校の部活をやりながらテニススクールに通い始めました。気づいたらボールを打っていたという感じですね。(笑) スクールでは硬式でしたから本当は、中学校でも硬式をやりたいんですけど、部活は軟式しかなかったのですね、しかたなくという気持ちも正直ありました。だけど、その当時中学校のソフトテニス部は強くて、関東大会とかに出場していましたから、入部を決めました。実は、バスケ部に入ろうかと迷ってました。

キャプテンとして

こう見えても、この夏までキャプテンを務めていたんです。寮長や副キャプテンなどいろいろな役割はありますが、キャプテンとなるとやっぱり特別なものがあります。練習時間やメニュー内容もキャプテンが決めますし、やっぱり上級生がしっかりやらないと下級生もだらけてしまうので、特にキャプテンは模範的な立場ですから、その点では自分にも他人にも厳しくやってきたつもりです。

上を目指す 気持ちが大切

3年生の時、東日本学生大会(団体戦)で惜しくも2位だったんですが、あと一步のところで負けてしまった自分の試合が敗因だったんです。本当に悔しかったです。そんな悔しい思いを抱いて望んだ最後の大会は、念願の優勝を掴み取ることができ、大学としては28年ぶりの快挙でした。団体戦として優勝できたことが、キャプテンとして特別に嬉しかったですね。全員が一丸となって盛り上がる団体戦の素晴らしさを改めて感じることができました。

上を目指す 気持ちが大切

今、プロテニス界では錦織選手が活躍しています。彼が言っている「泥臭くても勝つ」という言葉があって、その言葉が自分の中でもモットーになっています。正直、自分自身技術面ではそんなに優れているとは思っていません。だけど、何とかくらいついてい本決めようという気持ち。その積み重ねがつかなくて、上手い選手にも勝てたような気がします。

また、いい指導者に巡り合えることは、とても大切なことです。錦織選手もそうだと思いますし、自分も中学校・高校とすばらしい指導者に巡り合



木川 拓也さん (22歳・林)
今年の1月10日、旭市の東総運動場で香取地区ソフトテニス講習会に参加予定。多古米が好き

えたことに感謝しています。もし、出会えていなければ、ちょっとテニスが上手い人で終わっていたような気がします。

ただ、それだけではだめだとも思っています。上を目指すという気持ちが必要ならば、せっかくの良い指導も無駄になってしまいます。また、教わったことを100%身に着けることは結構難しいことだと思っています。やっぱり、そこにプラスアルファとして、上手な人のプレーを見て勉強して実践で生かす。この人みたいになりたいという思いを持って自分で努力することが一番大事じゃないかと思えます。僕自身もそのことは強く思っています。僕自身もそのことは強く思っています。母校である多古中学校で頑張っているテニス部員たちにも、ぜひそういう気持ちで上を目指してもらいたいですね。

「多古元氣人」では、年齢・性別・分野を問わず、生き生きと元気に活動している人を紹介していきます。これからも「たこげんじん」を発見したいときは、皆さんにご紹介します。

